

富永先生との思い出
～マンハイムからハイデルベルク旧街へ遊ぶ～

中島巖

1992年夏、ザールブリュッケンで第2回日独社会科学学会が開催された際の帰途、私は富永先生と一緒にマンハイム駅前のゴルデネガンズに投宿。同日午後、先生とOEGでハイデルベルクへ出掛けた。古城へ登り、フィロゾーフエンヴェークを逍遙、旧街も散策して、23時23分発の最終IRで辛うじて宿泊ホテルに戻った事を、いま懐かしく回想いたします。

私は大阪大学の出身で、先生の講筵に列した者ではありませんが、上記の学会を契機に親しくして頂き、ご高著を幾冊もサイン入りで賜りました。昨今もページを繰って懐かしく続読いたします。

私感では、先生は根のお優しい方で、それはドイツ語で話される口吻にも感じられました。私が学会の壇上で発表(独)した際には、下段して側を通ると、「良かったよ」と優しく声を掛けられ、評して下さったりしました。

同学会の第3回は関西大学で引き受けましたが、それはザールブリュッケンで下相談の折りに、なかなか会場が決まらず、日本側代表の先生が困惑されるなか、少しでも先生を助力しようと私から申し出たような次第でした。会場には、100周年記念会館内の特別会場を用意し、雰囲気も良い運びとなりました。その閉会後の夕刻、皆でお寿司を食べに行こうとなつて、予定のスケジュールを外れる場面が生まれました。宿舎へのマイクロバス手配も乱れ、困惑して居りますと、ひとり富永先生のみ私に同行して下さい、2人だけでバスに乗ってホテルに戻りました。その晩は、先生と2人だけで遅くまで語らう機会を得たのでした。

そもそも人の「こころ」は奈辺に有るのでしょうか。「からだ」は生理学的な物質から成っている以上、いつかは土に返る宿命ですが、「こころ」はどうか。富永先生は今も私の「こころ」の内に、いつでも「生きて」お出でです。

「こころ」とは元来、個人の中に閉じ込められているものではない、そうではなく人間(じんかん)に、即ち“zwischenmenschlich”にこそ有るのではないか。富永先生の生前のお姿を偲びつつ、そう私は思います。